論　文 ニダバ (*Nidaba*) 41(2012), 71-80

サムエル記・列王記と歴史誌の並行箇所の比較

—*hayah*（be 動詞相当）の *katal* 形を中心に—

池田　晶

1. はじめに

本稿では、旧約聖書中のサムエル記・列王記と歴代誌の並行箇所における be 動詞に相当する動詞 *hayah* の接尾活用形である *katal* 形[1]を分析する。本稿の目的を述べるにあたっては、まずヘブライ語史における聖書ヘブライ語について、本稿のコーパスとなった上述の三書について、そして聖書ヘブライ語の動詞体系について概観する必要があるので、それらを簡単にまとめる。その次に何故 *hayah* の *katal* 形のみに焦点を絞ったのかを述べ、具体的なテキスト分析を行う、という手順を取りたい。

1.1 ヘブライ語史における聖書ヘブライ語

聖書ヘブライ語(Biblical Hebrew, 以下 BH)は前 11 世紀から前 2 世紀ころまで用いられ、ヘブライ語聖書（旧約聖書）によって代表される言語を指し、時代に基づく下位区分がある。最も古い時代層のものは初期聖書ヘブライ語（Early Biblical Hebrew）とよばれる詩文のヘブライ語である。聖書の散文部分に見られるヘブライ語は、紀元前 586 年のバビロン捕囚をおおよその目安として時期的に 2 つに区分される。バビロン捕囚前のものは散文の規範とされており、標準聖書ヘブライ語（Standard Biblical Hebrew, 以下 SBH）、そして、捕囚期以後のものは後期聖書ヘブライ語（Late Biblical Hebrew, 以下 LBH）と呼ばれる。SBH と LBH には時代的に開きがあるので、当然動詞組織にも変化がみられる。池田潤 (2011) では次のように述べられている。

> (*BH の後の*) ミシュナ・ヘブライ語では接頭活用形の過去の用法（とくにワウ継続法 (*wayyktol*)）（中略）は失われ、聖書ヘブライ語では文脈しだいであらゆるテンス、アスペクト、モダリティーを表しうる接尾活用形は過去（*preterite*）の意味に特化しました。
>
> 池田潤 (*ibid.*: 245, 斜体字は本稿筆者による。)

ただし、LBH は SBH との違いが出てきてはいるものの、SBH は旧約聖書の「規範」とされていたので、LBH の時代でも依然として用いられていたということには注意する必要がある。

1.2 サムエル記・列王記、そして歴代誌[2]

三ノ上 (1996：114-115)、池田裕 (2001: 385, 387-388) で指摘されているように、歴代誌は LBH の時代に書かれたものだが、SBH の時代に書かれたとされるサムエル記と列王記を基礎資料のひとつとしている。ただし、シュミット (2004: 243) が述べるように、若干叙述内容において「アクセントの置き方が異なる」。

1.3 ヘブライ語の動詞組織について

BH の動詞には、次のものがある。preterite には *wayyiktol* 形、volitive には *ʔektol / niktol*、それぞれ歴史的起源は異なるが jussive と imperfect には *yiktol* 形がある[3]。このほかに、伝統的には完了形とされてきた *katal* 形があるが、池田潤 (2004) では、Hopper (1979) の前景・背景理論を分析のたたき台のひとつとして、物語における *katal* 形を分析した。その結果、次の 3 つの提案がなされた。

1) 聖書ヘブライ語の *katal* 形は TMA (以降 Tense, Mood, Aspect) に関して無標である。
2) *katal* 形の TMA は文脈(前の文の TMA と構文、同一文中の副詞)によって決まる。
3) 文脈からとくに指定がない場合、*katal* 形の動詞の意味に応じてデフォルト値をとる(動作動詞は過去、状態動詞は現在ないし習慣)。

ただし、この分析では、物語の「背景」とされる会話文は分析の対象とはなっていなかった。池田晶 (2005) では、会話文における *katal* 形を分析した結果、池田潤 (*ibid.*) の枠組みで説明できない *katal* 形の例が会話文で多く見られることが明らかとなった。そして、池田潤 (*ibid.*) の枠組みに若干の修正を加えることによって、会話文の *katal* 形を分析する際の枠組みとして、以下の提案をした。

1) 地の文と同じくTMAに関して無標な *katal* 形も見られる
2) 会話文における聖書ヘブライ語の *katal* 形のデフォルト値は人称との関わり、地の文のそれとは異なる例が多く見られる。2人称で非過去のときは命令のムードを帯びることが多い

1.4 問題の所在と動機：なぜ LBH の並行箇所では *hayah* が削除されているのか。

katal 形の分析結果、地の文と会話文とでは何らかの差があるということに加えて SBH と LBH では、*katal* 形にどのような変化が見られるか、ということに興味を持つようになった[4]。2010 年 3 月に Tel Aviv 大学（イスラエル）の Shlomo Izre'el 教授が来日された際に筑波大学にて International Workshop on Afroasiatic Languages が行われたが、筆者は以上の研究を踏まえて、"*Katal* in Narrative and Dialogue (and its historical change)" と題した発表を行なった[5]。その際、サムエル記・列王記と歴代誌の並行箇所を比較することによって *katal* 形の歴史的変化の手がかりを得ようとしたが、その時 SBH の時代に成立した列王記には *hayah* があるのに、LBH の歴代誌では *hayah* が削除されている次の例が見られた。

וְעַל־חָכְמָתֶךָ:	עַל־דְּבָרֶיךָ	בְּאַרְצִי	שָׁמַעְתִּי	אֲשֶׁר	הַדָּבָר	הָיָה	אֱמֶת	王上 10:6b
וְעַל־חָכְמָתֶךָ:	עַל־דְּבָרֶיךָ	בְּאַרְצִי	שָׁמַעְתִּי	אֲשֶׁר	הַדָּבָר	削除	אֱמֶת	歴下 9:5b
and your wisdom	about you	in my land	I heard	which	the thing	*hayah*	truth	語　義

「私が私の国で、あなたの事績とあなたの知恵について聞いていたことは本当でした。

池田裕 (1999)[6]

この例は会話文の最初の部分であるので、地の文とは TMA が切り離されている。会話文の例ではあるが、池田潤 (2004) の枠組みにも当てはまる部分があるので、まずその枠組みで *hayah* を考えてみると、be 動詞相当ということで状態動詞ということになる。したがって TMA に関しては文脈からの指定はない、つまり地の文の TMA の影響はないのでデフォルト値の「現在・習慣」ということになる。

それでは、この部分の *hayah* を「現在」と解釈することは妥当であろうか。解釈の「目安」として、並行箇所の日本語訳聖書3種類と英訳聖書7種類[7]を参考にしてみると、日本語訳では、上の池田裕氏による翻訳の引用をはじめとして、全て「タ形」、英訳聖書では4種類が preterite で、残りの3種類が present で翻訳していた。

本稿筆者は「タ形」の解釈は妥当なものだと思うが、別の可能性として、「(a) 私が～聞いたことは、本当のことだったのですね」「(b) ～聞いたことは、本当のことなのですね」というものもあり得ると思う。(a) は「だった」というように preterite が入ってはいるものの、文末で「ですね」というように現在性とモダリティーが加わっており、特に (b) は現在性とモダリティーのみ、という解釈になっている。これらの日本語訳と英訳から、この並行箇所の *hayah* のテンスに関しては揺れがあることは確認できたものの、池田潤 (*ibid.*) の枠組みで解釈することは可能だろう。

それでは、なぜ列王記のこの箇所の *hayah* を削除しているのであろうか。先ほども述べたように、列王記は SBH の時代に成立した文書であるが、歴代誌は LBH の時代に列王記等を基礎資料にしながら編集された。また、LBH の時代には SBH の時代に preterite として使われていた *wayyktol* の使用率が下がり、*katal* が preterite として使われはじめた。これらのことから、LBH の時代に present の可能性も捨てきれない *katal* は当時の編集者からすると不自然であるので、歴代誌の並行箇所の *katal* は削除されたのではないかという疑問が出てきた。これに何らかの解決の指針を与えるために、サムエル記・列王記と歴代誌の並行箇所の *hayah* の *katal* 形に焦点を絞り、前後の文脈の TMA 解釈、文体差、そして構文に注目しつつ、*hayah* がテキストの中でいかなる意味を持ち、もし削除されているとしたらどのような場合に削除されているのかを考察したいと思う。

2. 分析

2.1. データ集積方法と *hayah* の出現箇所

まず、池田裕 (2001) の注解に書かれているサムエル記・列王記との並行箇所をリスト

アップした。そして、聖書テキスト検索ソフトの Bible Works 5.0 で歴代誌に出てくる *hayah* の *katal* 形を検索し、並行箇所のリストに載っている部分をピックアップした。

2.2. *hayah* の書き換えがない場合

2.2.1. 分析例 (1)：サム下 7:24b と歴上 17:22b【主節・会話文, copula】

(A)サム下.7:24a あなたは、あなたの民イスラエルをご自分の民として永遠に立てられました(wayyktol)。

歴上.17:22a あなたは、あなたの民イスラエルを永遠にご自分の民とされました(wayyktol)。

(B) サム下 7:24b／歴上 17:22b ヤハウェよ、あなたは彼らの神となられました(katal)／彼らの神です(katal)。

וְאַתָּה יְהוָה הָיִיתָ לָהֶם לֵאלֹהִים׃

この場面では、ダビデが神に感謝を捧げる場面で、これまで神が自分たちを救ってきたこと等を述べており、*hayah* は機能的にはコピュラである。(A) の *wayyktol* から、過去のことが述べられていることが分かる。(B) の二人称男性形の *hayah* の *katal* 形は *wayyktol* から影響を受けて preterite ということになる。これ以下は、神に願いを請う内容へと続いていく。この (B) は日本語の感覚からすると、*wayyktol* から影響を受けて preterite として解釈する他に、「（今）彼らの神になった」というように英語の現在完了のような意味や、眼前の事実を断言する「彼らの神である」という意味にも解釈することもでき、解釈に揺れがあると言える。参考までに英訳聖書はどのようになっているだろうか。サム下、歴上のどちらも preterite として解釈している例が4例、present-perfect として解釈しているものが3例である。ただし、preterite, present-perfectそれぞれ4例と3例ではあるものの、詳細にみると下のような結果になっている。同じ英訳聖書の中の同じヘブライ語本文の解釈であっても、NLT, NAB は *hayah* の TMA 解釈がサム下と歴上で異なっている。このことから、本例の *hayah* の TMAに は揺れがあると考えられる。

	サム下7:24	歴上17:22
preterite	ESV, NJB, NRS, **NLT**	ESV, NJB, NRS, **NAB**
present-perfect	NIV, NKJ, **NAB**	NIV, NKJ, **NLT**

2.2.2. 分析例 (2)：サム下 8:10 と歴上 18:9-10 【従属節・地の文, copula】

(C) サム下.8:10a-c トイは自分の息子のヨラムをダビデ王のもとに送った(wayyktol)、

歴上.18:10b-d 彼(トウ)は自分の息子のハドラムをダビデ王のもとに送った(wayyktol)。

(D) サム下.8:10d／歴上.18:10e なぜならハダドエゼルはトイ／トウの交戦相手だった(katal)からである。

כִּי־אִישׁ מִלְחֲמוֹתֹשׁ תֹּעוּ/תֹּעִי הָיָה הֲדַדְעֶזֶר

本例の (D) は地の文であるが、従属節中にあるので主節の *wayyktol* の影響を受けない。したがって、池田潤 (2004) の枠組みでは *hayah* は状態動詞ということになるので「現在・習慣」ということになるが、テンスとして「現在」と解釈するよりは「過去」ととる方が

自然である[8]。LBH では *katal* 形が preterite に特化しつつあったということで、LBHの歴上で *hayah* が使われているのは理解できるが、SBH のサム下でも *hayah* が使われていることには疑問が残る。同様の例が以下 「サム下. 10:5bと歴上. 19:5c【従属節・地の文】」、「サム下 10:9aと歴上 19:10a【従属節・地の文】」、「王下 8:18と歴下21:6【従属節・地の文】」の例にも見られる。また 「王上 9:19と歴下8:6【関係節・地の文】」、「王上 10:2と歴下9:1【関係節・地の文】」は従属節でなく、関係節の例になるが、関係節の場合も主節の TMA の影響を受けないのでデフォルト値をとるが、従属節の例と同様の結果となっている。

2.2.3. 分析例 (3)：王上 12:24 と歴下 11:4【従属節・会話文】

(E) 王上 12:23-24d／歴下 11:4c「～に言え(命令)(次のように)語って(不定形)。

『ヤハウェはこう言われた(katal)、「…～してはならない。それぞれ自分の家に帰れ(命令)。

王上.12:24e／歴下.11:4d なぜなら、この言葉は、わたしから出てきた(katal)から」と』」。

כִּי מֵאִתִּי נִהְיָה הַדָּבָר הַזֶּה

本例も従属節中のものであるが、今までの例とは異なり再帰・受け身の意味を持つ *hayah* の *niph'al* の *katal* である。したがって、英語でいうと何らかの形容詞が後続して状態を表すものとも、コピュラとしての用法とも異なる。*hayah* は be 動詞に相当するので「基本的には」状態動詞だが、BH の最新の大辞典である Koehler-Baumgartner による The Hebrew & Aramaic Lexicon of the Old Testament では「a) to occur」の項目の下に分類されており、特に本例の王上 12:24 と歴下 11:4 が例としてあげられ、そこでは「is done, caused by」と解釈されており、意味的には動作動詞である。池田潤 (2004) と池田晶 (2005) の枠組みから解釈すると、本例は従属節中にあると言うことで、TMA はデフォルト値をとる。基本的には *hayah* は状態動詞なので「現在ないし習慣」ということになる。しかし上で見たように、意味的には状態動詞で解釈することには疑問の余地がある。そうであれば、動作動詞ということで「過去」ということになる。参考までに 7 種の英訳聖書では preterite で解釈している例はなく、現在形 6 例、現在完了 1 例となっており、テンスとしては現在である。また、上記の大辞典では be 動詞が現在形になっていることに注目したい。

それでは、この *hayah* を現在として解釈することは妥当であろうか。この場面はヤハウェが言葉を人々に伝えるように命じている場面である。つまり、この「כִּי מֵאִתִּי נִהְיָה הַדָּבָר הַזֶּה」という言葉を聞くのは、聴き手である「人々」が、ある未来の時点において、「כִּי מֵאִתִּי נִהְיָה הַדָּבָר הַזֶּה」ということを「過去」のこととしてとらえていると考える方が自然である。したがって、この例では *hayah* を「動作動詞」としてテンスを過去ととらえる方が良いと思われる。同じ *katal* でも態や意味によって TMA のデフォルト値を再考する余地がある、ということが示されていると言える。

2.2.4. 分析例 (4)：王上 10:5 と歴下 9:4【否定文・地の文】

(F) 王上 10:4-5a／歴下 9:3-4a シェバの女王は…を見た(wayyktol)。

王上.10:5b／歴下.9:4b そして、もはや彼女の中に魂は無かった(katal:否定辞付)(意訳:圧倒された)。

9 וְלֹא־הָיָה בָהּ עוֹד רוּחַ׃

本例は否定文であるが、直前の *wayyktol* のTMAを受けてテンスが過去になっている。そもそも否定文では、文頭に否定辞が来るので、同じく文頭に来る *wayyktol* は共起できない。したがってpreterite をテンスとして用いるためには、*katal* を使わざるを得ない。

2.3.書き換えがある場合

2.3.1. 分析例 (5) サム下 6:16 と歴上 15:29 【従属節・地の文】

(G) サム下.6:16a ヤハウェの箱が…着いたとき、／歴上.15:29a ヤハウェの契約の箱が…着いたとき、

וְהָיָה אֲרוֹן יְהוָה בָּא サム下 6:16a／וַיְהִי אֲרוֹן בְּרִית יְהוָה בָּא 歴上 15:29a

Joüon (2008: 376) では、本来ならば歴上の方が正しいと説明されている。ここは、物語の場面転換が起こっている始まりの箇所である。テンスとして preterite を表示しなければならないが「来た」と訳される בָּא は分詞なので TMA を担わない。したがって *hayah* がそれを担うことになる。サムでは本動詞が *hayah* の *katal* なので TMA を担うことになりそうだが、*katal* は TMA については無標なので、物語の TMA 設定のなされていない冒頭部分ではデフォルト値の「現在ないし習慣」ということになる。しかし、それは明らかに不自然である。したがって、preterite にするならば *wayyktol* を使うしかない[10]。*katal* が *wayyktol* に書き換えられている例としては、次のものがある。

(H) 王上 5:1 と歴下 9:26 【地の文・主節】

王上 5:1a ソロモンは、……の支配者だった(katal)。 ..... וּשְׁלֹמֹה הָיָה מוֹשֵׁל

歴下.9:26 彼は……の支配者だった(wayyktol)。 ..... וַיְהִי מוֹשֵׁל

ただし並行箇所であるものの、前後の流れが異なっている。王上の場合は、王国の行政者のリストが先行しており、分詞等 TMA を持たない要素を用いて王国の様子が述べられた後に、ソロモンのことについて述べる本節へと続いている。本節の冒頭に「ソロモン」が主語として配置されているが、その理由としてソロモンにフォーカスが当てられているということが考えられる。後者は、*wayyktol* でソロモンが王国において行った事柄が述べられた後に、それに引き続き *wayyktol* で始まる本節へとつながっている。したがって、この例ではフォーカスの違いが原因の一つであると考えられる。それでは、王上の TMA はどうなるであろうか。過去のことについて語っているので preterite になるはずだが、上で述べたように分詞等 TMA を持たない要素の連続した文に後続しているので、ここではデフォルト値の「現在ないし習慣」ということになるが、そうすると不自然になる。また、この *hayah* はコピュラでもある。(H) も(G) と似た例だと言えるが、フォーカスと *katal* のデフォルト値の関係については再考の余地がある。

2.3.2. 分析例 (6) 王上 3:12-13 と 歴下 1:11b-12 【会話文・関係節】

(I) 王上.3:11a／歴下.1:11a 神は彼／ソロモンに言った(wayyktol)。

王上.3:11b「お前はこのことを求めた(katal)からである。 יַעַן אֲשֶׁר שָׁאַלְתָּ אֶת־הַדָּבָר הַזֶּה

歴下.1:11b「これがお前の心にある(katal)ものである。 יַעַן אֲשֶׁר הָיְתָה זֹאת עִם־לְבָבֶךָ

本例では、並行箇所で王上の 「שָׁאַלְתָּ（求める、*katal* 2人称単数）」が歴下で「הָיְתָה（*hayah, katal* 2人称単数）」になっており、単語そのものが別のものに書き換えられている。ここは、これから国を治めるにあたり、ソロモンが神に知恵と知識を授けるように求め、それに対して神が応答する場面で、会話文の冒頭部である。地の文とは TMA が切り離されているので動詞はデフォルト値をとるはずである。王上の 「שָׁאַלְתָּ（求める、*katal* 2人称単数）」は動作動詞であるので、テンスとしては preterite になる。しかし、英訳では、7種類すべて現在完了になっている。解釈としては「たった今、求めた」というように現在完了としてとることも可能である。一方、歴下の「הָיְתָה（*hayah, katal* 2人称単数）」は状態動詞なのでテンスとしては、現在になる。しかし、英訳では過去が4例、現在が2例、現在完了が1例となっている。ソロモンが求めている時点（場合によっては、求めるよりも以前も含める）から神が応答している時点も含めて、「心の中にあり続ける」という解釈も可能なので、過去よりも、現在ないし現在完了の方が適切、つまりテンスとしては現在というのが自然ではないだろうか。この会話文の例から、*katal* のデフォルト値の TMA については再考の余地があることが示されていると言える。

2.3.3. 分析例 (7) 王上 10:3 と歴下 9:2【地の文・否定文】

(J) 王上.10:3a／歴下.9:2a ソロモンは彼女の質問にすべて答えた(wayyktol)。

(K) 王上.10:3b（答えられなくて）王から隠された物事はなかった(否定+katal)。

歴下.9:2b（答えられなくて）ソロモンから、物事は隠されなかった(否定+katal)。

לֹא־הָיָה דָבָר נֶעְלָם מִן־הַמֶּלֶךְ／וְלֹא־נֶעְלַם דָּבָר מִשְּׁלֹמֹה 歴下 9:2b 王上 10:3b

本例では、「王」「ソロモン」と削除された *hayah* を除くと、語順に違いはあるものの一見同じ語が遣われているようにみえる。ただし、王上の「נֶעְלָם 隠された」は分詞で、歴下の「נֶעְלַם 隠された」は本動詞で *katal* 形である。したがって王上と歴下ではそれぞれ *hayah* と「נֶעְלָם 隠された」が TMA を担う。どちらも(J) の影響を受けて preterite となる。

2.4. 削除されている場合[11]

2.4.1. 分析例 (8) サム下 5:2 と歴上. 11:2【会話文・主節, copula】

(L) サム下.5:2a かつてサウルが私たちの王であった(不定形)とき

歴上.11:2a かつてサウルが私たちの王であった(不定形)ときでさえ

(M) サム下.5:2b／歴上.11:2b あなたは、イスラエルに退かせたり入らせたりする人でした(katal)[12]。

（意訳：イスラエルが出て行くのも退くのも、あなたの指揮によりました。）

אַתָּה הָיִיתָ הַמּוֹצִיא וְהַמֵּבִיא אֶת־יִשְׂרָאֵל サム下 5:2b
אַתָּה הַמּוֹצִיא וְהַמֵּבִיא אֶת־יִשְׂרָאֵל 歴上 11:2b

本例は、全イスラエルの民衆がダビデのもとに集まり、王となってくれるように訴えかける場面である。(L) の「かつて」から文脈に過去のニュアンスが加わる。その影響を受け、(M) サム下の *katal* のテンスは preterite になる。英訳 7 種類も全て preterite で解釈している。(L) の歴上において「でさえ」が付加されているのと、(M) の歴上で *katal* が削除されている以外は、全く同じである。会話文で *hayah* が省略されている点で同じということで、本研究の出発点となった「シェバの女王の来訪」のエピソードの王上 10:6 と歴下 9:5 との共通点を述べたい。シェバの女王のエピソードは、彼女の想像をはるかに超えた知恵を垣間見て驚いて発せられたもの、つまり感情が込められたものである。したがって、モダリティーとの関わりが指摘できる。一方、本例では特に歴下の方には「でさえ」が加筆されていることからも、感情面を強調していると解釈すること、つまりここでもモダリティーとの関わりが指摘できる。また、両者共にコピュラである。コピュラという点では 分析例 (1) は、事実を述べる場面であったが、そこはモダリティーとの関わりはなさそうである。このことから、会話文においては、削除された原因のひとつとして、モダリティーとの関わりも指摘できる。

2.4.2. 分析例 (9) 王下 8:17 と歴下 21:5

(N) 王下.8:17a 32 歳だった、彼(＝イェホラム)が王となったとき、

歴下.21:5a 32 歳、イェホラムが王となったとき、

בֶּן־שְׁלֹשִׁים וּשְׁתַּיִם שָׁנָה הָיָה בְּמָלְכוֹ 王下 8:17a
בֶּן־שְׁלֹשִׁים וּשְׁתַּיִם שָׁנָה יְהוֹרָם בְּמָלְכוֹ 歴下 21:5a

本例で *hayah* の有無以外で異なっている点は、歴下に意味上の主語に当たる固有名詞「イェホラム」が入っている点である。サム、王、歴には、「Cבְּ B (הָיָה) שָׁנָה A־בֶּן : B は C のとき A 歳だった」という表現が同様の表現が頻出するので、*hayah* の削除が時代差によるものなのか、それとも固有名詞の有無等の構文によるものなのか、ということを判断するために出現箇所を見ると下のような結果となった。

	SBH	LBH
Cבְּ הָיָה שָׁנָה A־בֶּן	王下 **8:17a**, 14:2, 15:2, 15:33, 18:2	代下 27:8,
Cבְּ B שָׁנָה A־בֶּן	サム上 13:1, サム下 5:4, 王上 14:21, 王下 8:26, 11:21, 16:2, 21:1, 21:19, 22:1, 23:31, 23:36, 24:8, 24:18	代下 12:13b, 20:31, **21:5a**, 22:2, 26:3, 27:1, 28:1, 33:1, 33:21, 34:1, 36:2, 36:5, 36:9, 36:11
Cבְּ שָׁנָה A־בֶּן B	王上 22:42,	—

この他に「Cבְּ B הָיָה שָׁנָה A־בֶּן」、「Cבְּ הָיָה B שָׁנָה A־בֶּן」、「Cבְּ הָיָה שָׁנָה A־בֶּן B」、

「C שָׁנָה בְּ A־בֶּן־」という例も考えられるが、そのような例は見られなかった。この表と、その他の4つの考えられ得る例から、意味上の主語が固有名詞として入っている場合は、SBH と LBH を問わず、*hayah* が入っていないことが分かる。したがって、本例の *hayah* が歴下で削除されているのは時代差の問題ではなく、構文上の理由によるものである。

3. まとめと今後の課題

以上、*hayah* の書き換えがない場合、他の語へ書き換えられている場合、そして削除されている場合の3つに分けて分析したが、まとめると、以下のことが指摘できる。

● ***hayah* の書き換えがない場合**

1. 従属節・関係節の場合は、SBH と LBH のいずれにおいても削除がない。
2. 従属節・関係節の場合は、状態動詞であっても *hayah* はテンスとしてデフォルト値の現在を取るのではなく、過去と解釈できる例がほとんどである。
3. 否定文の場合は、統語上の規則から *wayyktol* が使えないのでテンス表示のためには *katal* を使わざるを得ない。
4. 会話文の *hayah* の TMA は複数の解釈の可能性がある。
5. 会話文で事実を述べる場合の *hayah* は削除されていない。

● **書き換えがある場合**

1. 会話文の *katal* のデフォルト値の TMA は複数の解釈が可能である。
2. フォーカスと *katal* のデフォルト値の関係については再考の余地がある。

● **削除されている場合**

1. 構文上の理由で *hayah* が削除される場合がある。
2. 会話文で *hayah* が削除されている場合はコピュラとしての用法である。本稿で見た例では、モダリティーとの関連が可能性の一つとして指摘できる。

以上のことは、並行箇所の分析という範囲内で、しかも be 動詞に相当するとされ、状態動詞として分類されている *hayah* の *katal* 形に限定したものである。*hayah* は、意味的にも動詞としてもかなり特殊なものと言えるかもしれない。したがって、今後は *hayah* だけでなく、他の動詞も考察の対象にして今回提示した結論を検証してみたいと思う。

註

[1]今回は印刷上の都合等を考慮に入れたヘブライ文字のラテン字転写法をとることにする。

[2] サムエル記、列王記、歴代誌、それぞれの上下巻から引用する際には、「サム／王／歴上・下」という略号を用いることにする。

[3] 詳しくは池田潤 (2004.: 74.fn. 24) を参照のこと。

[4] 2004年5月17日の聖書学研究所例会にて、池田潤氏が *katal* 形について「聖書ヘブライ語の動詞組織について」と題した発表を行われた際の質疑応答にて、故遠藤嘉信氏から、本発表が、SBH と LBH の両方に当てはまるものなのかどうか、という質問があった。それに対して、本発表では SBH の時代の物語を分析しているので LBH の *katal* 形については今後の課題と

する、という応答があった。このときから、本稿筆者は会話文の分析の際は SBH と LBH の両方を対象にしてみたい、という思いがあった。

[5] 会話文を分析する発表であったが、地の文を分析した池田潤 (2004) の研究紹介をする必要があったので題目に Narrative が含まれている。

[6] 日本語訳で、断りのない場合は筆者の訳とする。

[7] 翻訳聖書の場合は、原文からの直接翻訳だけでなく、重訳聖書もあると考えられるので、注意を要する。また、翻訳言語の特徴も考慮に入れる必要も出てくるだろう。この問題は別の機会に考えることとしたい。参考に用いたのは日本語訳では口語訳聖書、新共同訳聖書、そして池田裕氏による翻訳の以上 3 種類を、英訳聖書では New King James Version (1982)、New International Version (1984) 、New Revised Standard Version (1989) 、English Standard Version (2001)、The New Jerusalem Bible、New American Bible、New Living Translation である。それぞれ略号として、NKJ, NIV, NRS, ESV, NJB, NAB, NLT と記すことにする。

[8] ちなみに英訳聖書では、preterites が 1 例、past-perfect が 6 例である。

[9] 歴下では波線部の語順が入れ替わっている。

[10] 次のように推測することは無謀であろうか。つまり、歴代誌の編集者たちの時代の *katal* は preterite として用いられつつあったと推測できるので、SBH (*katal* は TMA に無標) としては奇異なものであっても LBH の時代の彼らにとっては preterite としての *katal* は理解できるものであった。しかし「規範」に近づけようとして、preterite に変化しつつあった *katal* を「規範」である SBH に合わせて *wayyktol* に変えたというように。このような判断をもとに歴代誌の編集者は書き換えを行ったのであろうか。本節で *katal* を用いることが、彼らの感覚からして「TMA とデフォルト値」の故に不自然であったと判断していたとしたら、池田潤 (2004) の「TMA に無標な *katal* とそのデフォルト値」に関する解釈を支えることになるのではないだろうか。

[11] 並行箇所として「サム下 8:10 と歴上 18:10【地の文・主節】」も上げられるが、この部分は動詞以外も削除されているものもあるので、今回の分析対象から除外した。

[12] 歴下の *katal* は削除されている。

【参照文献】

池田晶 (2005) 「聖書ヘブライ語の物語の会話文における *katal* 形の用法について」『言語学論叢』24:15-33 筑波大学一般・応用言語学研究室.

池田潤 (2004) 「アマルナ語から見た聖書ヘブライ語の接尾活用形」『言語研究』126: 69-92.

--------- (2011) 「ヘブライ語文法ハンドブック」白水社.

池田裕 (1998) 「旧約聖書 V サムエル記」岩波書店.

--------- (1999) 「旧約聖書 VI 列王記」岩波書店.

--------- (2001) 「旧約聖書 XV 歴代誌」岩波書店.

シュミット, W. H. (1994) 『旧約聖書入門 上』木幡藤子訳, 教文館.

三ノ上芳一 (1996) 「申命記史家と歴代誌家」『聖書学の方法と諸問題』現代聖書講座 2:113-139 日本基督教団出版局

Hopper, Paul J. (1979) Aspect and foregrounding in discourse. In: Talmy Givón (ed.) *Discourse and syntax*, 213-41. New York: Academic Press.

Joüon, P. and T. Muraoka (2008) *A Grammar of Biblical Hebrew*. 2nd ed. Roma: Editrice Pontificio Istituto Biblio.